

## 大坂本願寺「石山」表現の創出について

吉井 克信

戦国・織豊期における本願寺・一向一揆・寺内町を考察する場合、「石山本願寺」「石山合戦」「石山戦争」「石山寺内町」の分析は極めて重要な意義をもつ。

「大坂本願寺」は、一般には「石山本願寺」の名で知られている。戦国・織田政権期の八四年間（一四九六—一五八〇年、以下、元号・年省略）、現在の大坂城に所在した本願寺のことである。たとえば、『角川日本史辞典』には、

【いしやまほんがんじ 石山本願寺】

摂津大阪、俗称石山（現在の大坂城本丸）の地にあった浄土真宗の寺。一四九六（明応五）本願寺八世蓮如が建立した石山道場（石山御坊）に始まる。一五三二（天文二）山科本願寺の戦災後、一〇世証如が移住し、同宗の本寺とした。以後寺域を広げ、寺内町に新興商工業者を集め、防備施設を強化するなどして、戦国大名と対抗する一大領主勢力に発展。統一権力をめざす織田信長と鋭く対立。七〇（元龜一）以来一〇年間抗戦が続けたが、八〇（天正八）ついに敗れ、堂舎は焼亡。この戦いを石山合戦という。（傍線筆者・以下同様）とあり、最近の概説書・日本史辞典の記載もほぼ同様で、おおむね定説化している。

一方、「石山本願寺」の研究は、諸先学により貴重な成果が積み重ねられている。山根徳太郎氏・岡本良一氏らの所在地論争、

早島有毅氏・金龍静氏・草野顕之氏らの本願寺組織の実態解明、西川幸治氏・伊藤毅氏らの寺内町分析、さらには笠原一男氏・井上鋭夫氏・藤木久志氏らによって同寺を支えた地方寺院と門徒の実態が次第に明らかになってきた。

しかしながら、「石山本願寺」をめぐる先学の豊かな研究蓄積を振り返った時、次のような根本問題が最近まで看過されてきたことに気づく。すなわち、仁木宏氏・水藤真氏・上場顕雄氏によれば、先行研究が論拠をおく史料を見る限り、当該地を「石山」と呼ぶ例が中世史料に見られない点である。

そこで、曖昧さははらみつつ使用されている本願寺の呼称「石山」表現をめぐる諸問題の検討を試みる。なお、本願寺・寺内町の遺構埋蔵地点、空間構成、寺院組織の検討は重要で興味深い、今回は踏み込まない。むしろ本願寺の所在地名・呼称の検討という基礎作業に終始することで、「石山」の表現の妥当性をめぐる問題提起の機会としたい。

具体的には、次の三点から課題にアプローチする。第一に、天正八年以前の大坂に所在した本願寺が、同時代史料をみるかぎり「大坂本願寺」としか表現しえない点の再確認作業をする。そして、第二に、そこから派生する新たな問題として「石山」表現の開始時期を関連史料から検討する。最後に、第三として「大坂」表現から「石山」表現へと呼称（由緒・所在地名）が変更された必然性を模索し、その歴史的背景についての展望を試みる。なお、実証作業中心の1・2・3は、次に題名のみ掲げ、実証過程そのものは省略する。

- 1 中世史料での「石山」表現の検索
- 2 「石山」表現の開始時期

## 3 「石山」表現の必然性と歴史的背景

「石山」表現の使用開始時期は、①蓮如期の大坂坊舎草創時、②証如期の本願寺の大坂移転時、③江戸時代後期など諸説がある。本報告で検討した結果、『紫雲殿由縁記』にみえるため、遅くとも江戸時代前期（一七世紀半ば）には使用開始されていたと考えられる。また、『足利季世記』（一五七三—一六七三年頃の約一〇〇年間のいづれかに成立）に「石山上人」「今ノ大坂一向門跡」（「一」は割書）とみえる点から、和泉貝塚から摂津中島に寺基をおいて京都堀川に移るまでの摂津中島（天満）本願寺時代の約七十年間（一五八五—九一）に使用開始上限を設定できる可能性もある。いづれにせよ、なぜ、広範に定着していた「大坂」表現ではなく、新たな「石山」表現を使用せねばならなかったのか、この点が本願寺呼称（由緒・所在地名）としての「石山」表現使用の必然性を解くカギとなる。

豊臣政権首都地名として「大坂」が採用された結果、より広範な地域を意味する地名へと「大坂」は昇格した。これが、近世の大坂三郷となり、現在の大阪市のもととなっている。そこに秀吉の都市計画方針の一環として、貝塚に所在していた本願寺が「中島」に招致される。

すでに、広範な地域を意味する地名へと「大坂」が昇格した後、豊臣政権の招致で首都「大坂」の「中島」（天満）に移転してきた本願寺は、かつての「大坂本願寺」とは別の地域に所在しているにもかかわらず豊臣政権首都「大坂」地域内に包摂されているため、地名「大坂」による新旧寺地の混乱回避の必要に迫られていた。すなわち、現在の大坂城にあった旧寺地所在地を限定する地名としての「大坂」表現とは別に、新たに別の呼称を創出する

必然性が生じたわけである。

そこで、大坂本願寺時代に広まった本願寺「霊場説」にのっとり、①蓮如寺地選定の際の聖徳太子（未来記・貴童示現）にちなむ「御堂礎石」出土伝承、②蓮如生母の「石山寺」観音化身説、の二つの奇瑞をあわせもち、蓮如以来の由緒ある霊場説としての「大坂本願寺」を意味する旧所在地の呼称（由緒・所在地名）として「石山」を創出した可能性が濃厚である。

江戸初期の東本願寺の分立直後から東西両本願寺は、かつての信長との和陸派・徹底抗戦派の対立に起因する顕如・教如の大坂退去時期のズレの正統性をめぐって情報戦を展開する。一方、軍記物を見る限り、江戸初期の「大坂冬・夏の陣」以前には、いわゆる「石山本願寺」「石山合戦」「石山城」は、「大坂本願寺」「大坂合戦」「大坂城」と表現されており、「大坂合戦」といえば混乱せずに「本願寺合戦」を意味していたと推測できる。

江戸初期の本願寺東西分立と大坂冬・夏の陣を経た、江戸前期には『紫雲殿由縁記』で「石山」表現が使用されており、江戸中後期にいわゆる「石山合戦譚」が成立・定着するその過程で「石山」表現は全国へと広まっていったのではないか。

江戸後期の著作の大半が「石山」表現を使用していた点は、戦前の真宗史をはじめとする歴史学研究を規定し、「石山」表現があたかも歴史上の実在地名であるかのような錯覚を抱かせた。その戦前の歴史学研究における地名「大坂」表現と呼称「石山」表現との曖昧なままの混用が自明の前提となつて、戦後の歴史学さえも規定してきたものと考えられる。現時点では、以上のように理解しておきたい。